

避難所運営ゲームの効果

—コミュニケーションの向上に関して—

The effect of shelter management game
~with respect to improvement of within the community~

林 加代子 (Kayoko HAYASHI)

概要

防災を動機とする HUG (避難所運営ゲーム) ワークショップを行い、集まった参加者が「コミュニティ内の住民の多様性」を意識すること、そのためにはコミュニティ内のコミュニケーションが必要なことを理解し、取り組む契機とすることを目指す。

HUG の効果を測定するために、HUG ワークショップの実施後、アンケートを取り統計的手法で有意度を検証後、テキストマイニングを行った。クロス集計の結果から、地域内のコミュニケーション向上のための組み合わせが浮かび上がった。

キーワード

HUG (避難所運営ゲーム)、多様性、コミュニケーション、担い手、テキストマイニング

目次

- 1 はじめに
- 2 研究目的
- 3 研究方法
- 4 結果
- 5 活用
- 6 おわりに

1 はじめに

東日本大震災後、広く防災意識が高まっていると言われている。災害は地域全体に起こるため、従来、地域活動に積極的に参加していなかった世帯も防災訓練などに参加するようになってきているという。また、災害からの復旧・復興の早さは、被害の大きさではなく、コミュニティ内のつながりの密度によるという米国パデュー大学政治学部准教授 Daniel P Aldrich の研究結果もある⁽¹⁾。

現在では、東海・東南海・南海の3連動地震も懸念されており、減災や、事前復興、そのためにはコミュニティ内のつながりをつくるなどのソフト面の備えが注目されている。2014年11月22日に起こった長野県神城断層地震では、震度6弱で、住宅被

害は全壊31棟、半壊56棟、一部損壊は418棟(2014年11月25日17時時点、<http://mw.nikkei.com/sp/#!/article/DGXMZO80153950W4A121C1000000/>)であるという。この被害の中で、けが人はでたものの死者が0人というのは、日頃からの地域コミュニティ内のつながりができていた、災害に対するソフト面での備えができていたと言われている(中日新聞2014年11月29日朝刊)。

地域コミュニティ内でのつながり⁽²⁾をつくるためには、コミュニケーションが向上することが第一のステップであるとする、一日でも早い復旧・復興のためにもコミュニティ内にコミュニケーションがとられていることが求められる。

さらに、東日本大震災時の避難所では、女性や障

がい者、子ども、高齢者などに対する配慮が不足していたことで、これらの人々に高いストレスがかかっていたことも報告されている。普段の生活の中で住民の多様性に配慮されていることが重要である。

これらのことから、近年、参加者が増えている「防災訓練」を契機とすることで地域コミュニティ内のコミュニケーションが促進されるのではないかと仮説をたてた。その訓練時に多様な人々が住んでおり、その人々への配慮を考えるためのツールとして多様な避難者が登場する HUG（避難所運営ゲーム、以下 HUG）を活用し、地域内組織を中心に、普段は地域活動に参加していない年齢層へのアプローチも試みた。

その結果を今後のさらなるコミュニティ内のコミュニケーション促進の一助としたい。

2 研究目的

地域内に住む多様な人々への配慮を意識づけるとともに、地域コミュニティ内のコミュニケーション活性化を図ることを目的とする。

ワークショップ（導入、HUG、ふりかえり、まとめの一連のワークショップ）の際のアンケート分析から、多様性に配慮した地域コミュニティ実現にむけて新たな展開への糸口を探る。

3 研究方法

3.1 調査対象、調査期間

調査期間：2013年9月から12月

調査対象：6か所で行った HUG ワークショップでアンケート調査に応じた参加者は182名であった。今回は20歳未満の参加者を除く155名を対象とした（表1、表2参照）。

表1 調査対象と期間一覧表

回数	日時	主催	参加者数
1	2013年9月18日 10:00～11:50	名古屋市緑区鳴海 学区区政協力委員	54名
2	2013年9月9日 9:30～11:30	名古屋市昭和区広 路学区女性会	43名
3	2013年9月19日 13:00～16:00	名古屋市中区子ども 会連合会	44名(内 子ども21 名)
4	2013年9月28日 10:00～11:50	あいおい中央保険 サービス(株)	21名
5	2013年12月6日 13:30～16:00	あいおい中央保険 サービス(株)	12名
6	2013年12月19日 13:00～17:30	(特活)日本ファンリ テーション協会中部 支部	8名

表2 性別、年齢別対象者数

	男性	女性
30～40代	14	18
50代	16	19
60代～	36	52

3.2 調査方法

多様性を意識するようにアレンジした HUG ワークショップを行い、その後、アンケートを行う。

3.2.1 HUG の概要

HUG は、平成19年に静岡県が開発したカードゲームである。その内容は、小学校を避難所として、続々と避難してくる避難者をどこに配置するのか、次々に起こる避難所での課題解決を通して、災害時のシミュレーションを行うと同時に、平常時からの備えについての意識向上を図るものである。

カードは全部で250枚あり、そのうち避難者についてのカードは182枚、イベントカードと呼ばれる避難所で起こる課題が記載されたカードは48枚ある。静岡県が提案するすべてのカードシミュレーションを終えるには一般的に2時間から3時間ほどかかる。このほかに導入部の説明やふりかえり・共有などでさらに30分から40分は最低でもかかることになる。オリジナルの方法では、カードゲームを行う時間を2時間程度に設定することが多く、この時間内にどれだけカードを処理できるのかをグループごとに競うものである。

3.2.2 ワークショップの方法

上記の方法で行うと、3時間程度の時間の確保、グループワークとはいえ一部の人が決めてしまうことが多いため参加者全員の学びになりにくいこと、学びのための情報が提供されないこと、ゲームを進めることに集中してしまうために内容が記憶に残りにくいなどの課題がある。この課題を解決するために、テーマを避難者の多様性にしぼり、どのように配慮するのかについて話し合いによって解決していくようにアレンジした。

アレンジの方法は、避難者に関するもの91枚、課題に関するイベントカードを25枚抽出することで、カードゲームを行う時間を90分ほどに短縮した。また、学びにつながるよう、震災時の避難所の情報を写真等で共有した後、カードゲームを行うこととした。進め方はグループごとに進行を任せる競争ではなく、全てのグループが同時に進行するよう

に調整しながら、レクチャーの必要がある課題が出現する都度、以下の文献、避難所でのボランティア経験⁽³⁾、被災地でのヒアリングなどから抽出した情報を提供した。

- ・ 東日本大震災における女性の立場からの避難所運営のレポート『東日本大震災における支援活動の経験に関する調査報告書』⁽⁴⁾『男女共同参画の視点で実践する災害対策テキスト、災害とジェンダー<基礎編>』⁽⁵⁾
- ・ 障がい者からの避難所運営に関する報告書「障がいがある方たちの災害対応のてびき」⁽⁶⁾
- ・ 名古屋市避難所運営マニュアル⁽⁷⁾
- ・ 外国人とのコミュニケーションを図りやすくするための愛知県のアプリケーション「よくわかる日本語」
- ・ 心のケアに関する事柄については兵庫県心のケアセンター「サイコロジカルファーストエイド実施の手引き」⁽⁸⁾

3.3 アンケートの質問項目

アンケートでは、以下の項目についての質問を行った(表3)。

1. (1) 性別
(2) 年代
(3) 地域での役割
2. (1) 地域内の多様性理解度
(2) 多様性視点の必要性理解度
(3) 普段からの多様性への取組必要性
3. (1) 地域内の連携の必要性
(2) 活動へのヒントになったか(自由記述)
4. 感想など(自由記述)

3.4 統計処理方法

2段階に分けて処理を行った。

第1段階は、アンケートに答えた182名のうち0～20歳(28名)を除く154名を分析の対象とし、数値での回答アンケート項目2(2)、多様性への理解度2(3)、連携の必要性3(1)の4項目について性別、年齢別の平均値を求めた。ここで、3(1)連携の必要性については連続性を持たせて(4)と表記している。

第2段階は、性別と年代でクロスしたデータに対応する4. 感想などの自由記述についてテキストマイニング(KHコーダーによる)を行った。

表3 アンケート質問項目

<p>1. あなたの性別、年代をお知らせください。該当するところに○をお願いします。</p> <p>(1) 性別 男 女</p> <p>(2) 年代 ~9歳 10代 20代 30代 40代 50代 60代 70代 80歳~</p> <p>(3) 地域での役割 区政協力委員 民生委員 子ども会 女性会 PTA 消防団 その他</p> <p>2. 地域の多様性についてお尋ねします。右のグラフの該当する所○をお願いします。</p> <p>(1) 多様性の意味や概念をご理解、学びましたか?</p> <p>わからない 1 2 3 4 5 6 わかづ</p> <p>(2) あなたの住む地域、コミュニティで、多様性視点が必要だと思われましたか?</p> <p>そう思わない 1 2 3 4 5 6 そう思う</p> <p>(3) 災害時のみならず、普段から多様性を意識した取り組みをしてきたと思えますか?</p> <p>そう思わない 1 2 3 4 5 6 そう思う</p> <p>3. HUG体験後の感想について、お尋ねします。</p> <p>(1) 災害時は、今日参加して頂いた児童を含めた地域全体での協力が連携が必要だと思われましたか?</p> <p>そう思わない 1 2 3 4 5 6 そう思う</p> <p>(2) 今日の体験が、普段がなさまがなさって活動のヒントになったでしょうか? どのようなところがヒントになったのかも聞かせてください。</p> <p>4. 感想やご意見など、ご自由にご記入ください。</p>
--

4 結果

4.1 第1段階

2(1)～3(1)それぞれの設問に対する性別、年齢別の平均値をみると、有意な差が認められた。性別の平均値(図-1)では、4つの項目全てにおいて男性よりも女性の方が意識が高いことがわかった。これは、女性は健常であっても災害弱者と位置づけられていることから多様性の問題は、ジェンダーの課題と相まって自分事として捉えているのではないかと推測できる。

年代別の平均値(図-2)では、(1)理解、(2)必要、(4)連携に関しては、30～40代が最も高く、50代、60代になっていくにつれて意識が下がっていく。ところが、(3)取組については、30～40代が最も高いのは他の場合と同様であるが、50代が最も低く、次いで60代となっている。

このことから、若い世代の方が多様性に関する意識が高く、柔軟な意識を持っていることがいえる。しかし、実際の取り組みに関しては、60代以降の方が地域で活動している時間と実績から、意識が高くなっているといえる。50代はこの点、まだ現役で働いているであろうことから、実際の取り組みに関する意識が低い、または自分が実現することを想定していないのではないかと推測する。

4.2 第2段階

第1段階の平均値でみると、性別、年代別で有意な差があるようなので、性別と年代をクロスし、自

由記述についてテキストマイニングを行った。

代以上男女（図5）について掲載する。

ここでは、第1段階にて相関関係のみられた30代～40代の男女（図3）、50代男女（図4）、60

図1 性別の平均値

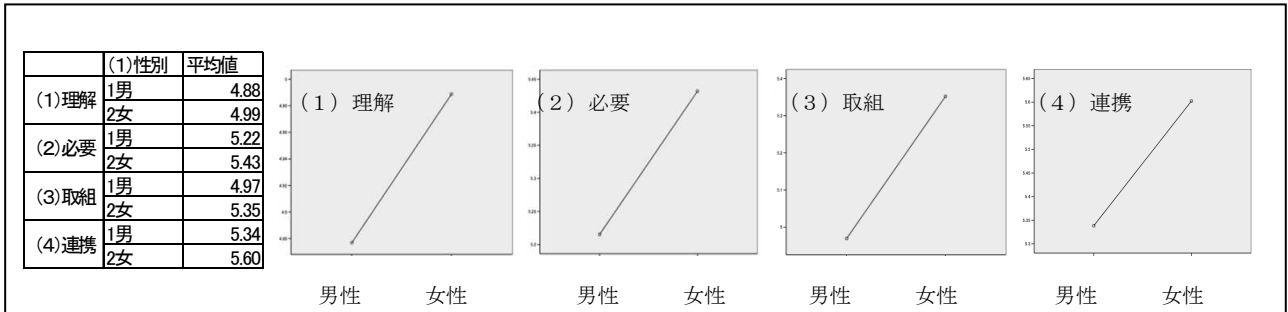
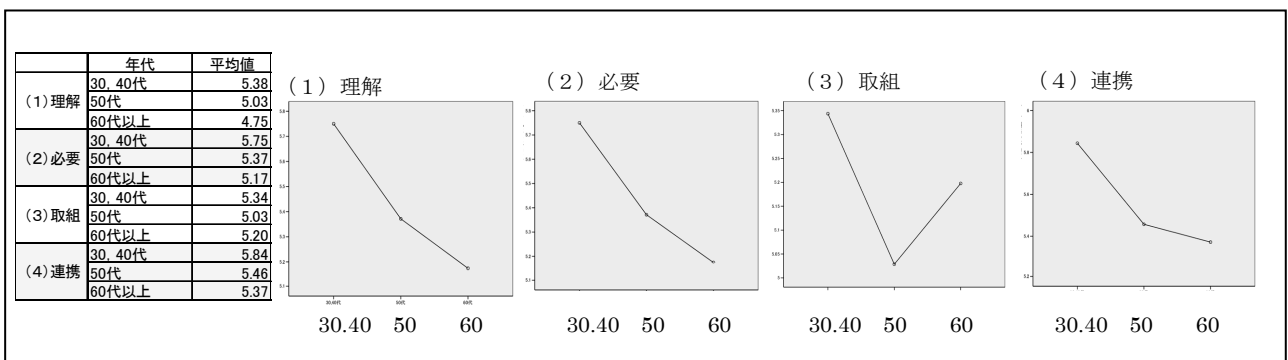


図2 年代別の平均値



4.2.1 共起ネットワーク図

ここに示している図は、「共起ネットワーク図で、抽出語、またはコードを用いて、出現パターンの似通ったものを線で結んだ図である。すなわち共起関係をエッジ（線）で表したネットワーク図を描き⁽⁹⁾」ており、言葉と言葉の結びつきの関係を示している。ここで示している共起ネットワーク図は「中心性媒介」であるが、実際には「中心性固有ベクトル」の図もあり、この二つを踏まえた考察を行っている。

以下の分析対象の共起ネットワーク図（図3-1～図5-2）については、文末にまとめて掲載した。また、同図にはカラー表示のものが存在するため、こちらはURLを別途設けて表示することとした（<http://1drv.ms/1AmVtIa>）。

4.2.2 用語の定義

【ノード】

図の中で、大きなノード（円）は頻出回数の多い言葉を表し、ノードが小さくなるほど頻出の回数は

少ない。また、ノードの色は濃いものから薄いものへと媒介性の強さを表している。⁽¹⁰⁾媒介性が強いとは、異なる集団の橋渡しをしている言葉であり、この言葉が除去されるとネットワークは分断され各塊を浮き上がらせる性質をもっている。

【エッジ】

図の中のノードを結ぶエッジ（線）は言葉の結びつきを示し、線の太さの太いものから細いものへ結びつきの強さを表している。

【布置】

ノードの位置の距離は、結びつきとは関係ない。ノードの位置が隣にあるからと言って、関係性が深いというものではない。

4.2.3 30代～40代

【男性 図3-1 29ページ】

30代～40代男性では、「思う」「視点」「女性」、「必要」「地域」「機会」「知る」「重要」「考える」「多様」「普段」「説明」がキーワードとして挙がっている。これは、説明（HUGワークショップ内でのレクチャー）によって、地域の中の事を知る必要性を感じた、

普段から多様な視点で見ることを重要であると考えたといえる。

「説明」・「HUG」・「女性」・「地域」・「必要」・「知る」・「機会」が太いエッジで結ばれている。これは、HUG の機会に女性への対応の説明が有効であったこと、地域内でも多様性の配慮を知る機会が必要だと考えたことを示している。

【女性 図 3-2 30 ページ】

30代～40代女性では、「人」「思う」「考える」、「避難」「いろいろ」「地域」「ふだん」「コミュニケーション」「大切」が挙がっている。これは、地域での避難には、いろいろな人がいることを想定しその対応を考えておく必要があると考えたこと、ふだんから地域内のコミュニケーションを大切にしておくことが重要だと考えたといえる。

「コミュニケーション」・「大切」、「避難」・「いろいろ」・「人」、「必要」・「多様」・「実際」・「自分」、「対応」・「体験」・「重要」が太いエッジで結ばれている。

このことから、普段のコミュニケーションが大切であること、いろいろな人が避難してくることを考えておくこと、自分も多様な人（災害弱者）に含まれていることを自覚したこと、体験を通して多様な人々への対応を考えることが重要であると考えたことがわかる。

さらに、避難者にはいろいろな人がいることは分かるが、自分もまた女性の立場から我慢せずに主張してもよいことに気づいたといえる。

【考察1】

30～40代男性には、地域、女性をはじめとする多様な人々がいることに目を向けるような説明とそれらを知る機会を提供することが、多様性に配慮した避難所運営と普段の行動に対して有効であるといえる。

30代～40代女性には避難所ではコミュニケーションの機会を設けること、その際には臆することなく話し合いに参加するよう促すことが効果的であるといえる。また、これは普段の地域内での行動でも積極的に発言することを促すことが必要である。

4.2.4 50代

【男性 図 4-1 31 ページ】

50代男性では、「思う」「人」「実際」「シミュレーション」「普段」「多様」がキーワードとなっている。

普段から実際に想定した、多様性への配慮ある対応をシミュレーションしておくことが重要だと考えたといえる。

「実際」・「シミュレーション」が太いエッジで結ばれている。このことから、実際に想定するシミュレーションをすることに強く共感しているといえる。

【女性 図 4-2 32 ページ】

50代女性では、「経験」「活動」「今日」「感じる」、「改めて」「必要」「人」「大切」「HUG」「少し」がキーワードとなっている。

今日の経験（HUGワークショップで得た知見）を普段の活動に活かすことが必要だと感じ、災害について考える事が大切だと思ったということがいえる。

また、この属性にだけ、図の中に「ありがとう」という感謝の言葉がキーワードとして出現している。このキーワードは、「経験」を中心とする塊（通常はコミュニティと呼ぶが、ここでは塊とする）と「ヒント」「セミナー」を中心とする塊をつないでいる。もう一度体験したい、広めたいというキーワードにつながる重要な感情であることがわかる。

「単位」を中心として「経験」、「防災」、「広げる」・「活動」・「多様」が太いエッジで結ばれている。このことから、特定の組織単位を使って経験すること、特定の組織単位で防災の活動や、今日の経験を広げることと考えたといえる。

「感じる」を中心として「改めて」、「必要」・「人」が太いエッジで結ばれている。これは、経験を通して改めて災害時は大変だと感じたこと、この経験は重要だと感じたこと、避難するには人が必要だと感じたことがいえる。

「HUG」・「少し」、「災害」・「体験」、「セミナー」・「来年」・「今日」・「参加」が太いエッジで結ばれている。これは、HUG で災害の体験を少しだがすることができたこと、今日のセミナーを来年も行い、参加したいと思ったといえる。

【考察2】

50代の男性には、シミュレーションで訴えることが非常に効果的であるといえる。今回参加した50代男性は現役で働いており、普段の生活には裏付けとなる根拠が求められている。このため、多様性への配慮や普段のコミュニケーションの必要性を訴える時にも観念ではなく、シミュレーションのような

実際に近い体験と、レクチャーの際には数字を挙げて説明することで訴求力がより高まるといえる。

50代女性の共起ネットワーク図はノード、エッジの数が多く、さまざまなことを受け取り、思考したことがわかった。HUG ワークショップでの経験を自身の活動に取り入れたり、広めて行こうという意欲が強いことがわかった。ここから、日ごろの活動に活かすよう考える時間を HUG ワークショップのまとめの段階に多めに確保することがより効果的であるといえる。

地域やボランティアな組織で活動している 50 代の女性には、感性に訴える質の高い情報や体験を提供することで、広まっていくことがわかった。また、感謝の気持ちをもって活動していることが分かった。これは、実際の災害時の行動や普段の活動にも影響していると考えられる。

4.2.3 60代

【男性 図 5-1 33 ページ】

「ゲーム」「避難」「参加」「全く」「混乱」「事例」「HUG」がキーワードとなっている。混乱している事例をゲーム化して体験する HUG は、60 代の男性には多様性を考える上でたいへん訴求力があつたといえる。また、避難する際には、女性や老人などの災害弱者の気持ちに配慮することが必要で、その知見を得たことが参考になったと思っている。避難時を想定したゲームをしながら、地域でのコミュニケーションを取ることは良いことだと思っている。

「プライバシー」、「(心の) ケア」の単語が出現している。これは、60 代男性にとっては、女性がプライバシーを大切にしたいと考えていること、心のケアが必要な場合が多いことなどが印象的であったことを示している。実際に東日本大震災の避難所では、避難所を取り仕切っていたのは 60 代の男性が多く、その中で女性はプライバシーが守られなかったり、必要な心のケアを受けたくても受けられなかったりとストレスの多い避難所の中でもさらに我慢を強いられた事例が報告されている⁽¹¹⁾。

「事例」・「混乱」・「全く」が太いエッジで結ばれている。これは、ゲームとして、混乱した事例が体験できることを好ましい、わかりやすいと思っていることを示している。また、「地域」・「コミュニケーション」が太いエッジで結ばれている。これは、地域内のコミュニケーションが重要だと思っていることを示している。「女性」・「老人」を中心として「プ

ライバシー」、「ケア」、「配慮」が太いエッジで結ばれている。災害弱者の中でも特に、女性に対してはプライバシーを守ることとケアすることを心がけること、老人に対しても配慮が必要だと思ったことが示されている。

【女性 図 5-2 34 ページ】

「知る」「心がける」「リーダー」「学ぶ」、「気がつく」「障害」「今回」「配慮」「精神」「問題」「直後」がキーワードとなっている。

女性の視点だけでなく、障害者という視点、心のケアにも配慮が必要であることを強く考えるようになったこと、避難所で多様な人々が少しでも心地よく暮らせるためには難しいことではあるがリーダーの多様性を考慮した避難所内の配置が重要であること、避難所へ入って直後の生活や生活しやすい場所などを考えることが配慮につながることを学んだといえる。

「配置」・「難しい」が太いエッジで結ばれており、これは、避難所での人の配置は難しいことを痛感したことを表している。「直後」・「学ぶ」「今後」のエッジでは、避難所に入ったときのことを学び今後活用したいと考えたことを示している。「起きる」・「実際」を結ぶエッジも太く、実際に起きた事例をレクチャーすることでより緊張感が高まり、配慮が必要な場面を想像しやすかったといえる。「HUG」・「精神」、「配慮」・「今回」と「障害」・「気がつく」・「知る」が太いエッジで結ばれている。これは、HUG に参加したことで障害を持った人が思いの外、いることに改めて気づき、配慮する方法などを知った、確認したということを示しているといえる。

【考察 3】

60 代以降の男性には、シミュレーションゲームの中で多様な人々に対する配慮などを訴えるだけでなく、普段からのコミュニケーションも必要であることを訴えることが重要で、実行に移すための効果がより期待できるといえる。また、男性の中でも寡黙で自分の意見を主張できない人もいた⁽¹²⁾。このような人にも配慮することが必要になってくるが、今回の参加者の中では、自分の意見は主張できる人が参加したといえる。

60 代以降の女性には、公の場では男性に遠慮する場面が多くみられることから、リーダーは男性とは限らず、女性が避難所のリーダー、サブリーダーと

なる場合もあることを受け入れること、リーダーに提案することを厭わないことなどが多様性に配慮した避難所運営には必要であることを訴えることが重要であるといえる。

5 活用

HUG ワークショップを実施したことで、住民にとってはコミュニティ内の多様な住民への対応や普段からのコミュニケーションの必要性をシミュレーションを通してより具体的な知識として得たといえる。得た知識の中でも性別、年齢によって、キーワードや言葉の結びつき、ベクトルの方向性に差異がみられることが検証できた。

結果の活用として、以下の5点を挙げるができる。①今回の分析結果を HUG 実施時に参加者の性別、年齢によってレクチャーの内容をより効果ができるようアレンジする。②分析の結果を活用し、地域内のコミュニケーション向上に寄与する契機とする。③地域コミュニティだけでなく、企業等の組織内のコミュニケーション向上に活用する。④公立小学校など避難所に指定されている管理者、職員等に実施することで避難時の第一次の対応に備える。⑤企業と地域、学校を結ぶ災害時の連携を目的とした平常時のコミュニケーションの向上に寄与する。

5.1 参加者の属性によってレクチャーの内容をアレンジする

参加している属性によって、シミュレーションゲームの前の説明やレクチャー部分の長さをアレンジしたり、まとめの過程に自分の地域の中ではどのように行動するのが適切なのかを考える時間を設けたりすると、より効果的な時間とすることができるのではないだろうか。

5.2 地域のコミュニケーション向上の契機とする

属性別に結果をみたことによって、地域内での多様性への意識、コミュニケーション向上のために、効果的な属性の組み合わせが考えられる。

例えば、意識の高い30～40代女性を地域のリーダー、サブリーダーとして養成し、60歳以降の地域の役員をしている男性との協働を目指す。摩擦が少なく、高い意識と地域内での影響力が組み合わさるので、ある程度の成果が期待できると想定する。また、高い理解力と行動力を備えている30～40代の男性と地域内で影響力のある60歳以降の女性が協

働すると、こちらにも成果が期待できる。成果を上げていく過程でコミュニケーションができ、多様性への理解が行動へつながっていくのではないだろうか。

地域内のイベントや役割など目的と手段によって組み合わせを変え、取り組むこともコミュニケーションが向上する契機となることが期待できる。

5.3 企業等の組織内のコミュニケーション向上

地域内での多様性意識、コミュニケーションの向上に役立つならば、企業内でも寄与すると考える。30～40代で企業の役職についている男性は、HUG ワークショップに参加した後、社内のコミュニケーション向上を目的として社内でも実施したところ、「普段話さない職員間に会話ができるようになった」と報告があった。

企業内での HUG ワークショップ実施は、地域の組織や行事に参加の少ない層に対して地域の重要性を訴えることもでき、地域に意識が向くこと、後述する協働の促進につながるのではないかと期待できる。

5.4 避難所に指定されている施設の関係者間で実施する

公立小学校など、避難所に指定されている施設の関係者、小学校教諭、自治体職員などで行えば、一時的ではあるが、実際に避難所を開設し、当初の運営を任されるであろう関係者の訓練になる。また、避難所となった施設の関係者からの情報も共有しやすいため、より適切な対応が期待できる。

これとともに、普段からの施設内でのコミュニケーションも向上する。実際に参加した教諭によると、勤務する小学校で短時間に実施してみたところ、「日常の会話の中に災害時の対応についての話題ができるようになり、コミュニケーションが向上している」という。

5.5 企業、地域、小学校を結ぶ

普段はなかなか協働しない企業と地域コミュニティ、小学校を HUG ワークショップを契機として結ぶことができるのではないだろうか。当然ではあるが、災害はあるエリアで起こるもので組織を選ばない⁽¹³⁾。地域社会に貢献したいと考えていても、方法や手段、アプローチなどを決めかねている企業も少なからずある。災害時を想定してこの三者が連携することは、非常に重要なことである。また、この

連携を契機としてエリアの中でのコミュニケーションが生まれ、向上するのではないかと期待する。

6 おわりに

防災は、分断された地域社会を従来とは違う形態で結び直すことができる契機となる。その際、地域社会を構成する多様な人々を尊重する地域社会に再構築しなければ、地域コミュニティに関わる市民は増えないであろう。さらにいえば、結び直す意義がないのではないだろうか。男性、女性、妊婦、乳幼児を連れた女性、子ども、障がい者、病気を抱えた人などさまざまな人へ配慮することが、暮らしやすい地域社会をつくっていく。その際、お互いの懸念や主張、提案などが安心な雰囲気の中で交換し、話し合いができることは重要なポイントとなる。そのためには普段のコミュニケーションが欠かせない。

また、地域社会の中で、現役で働いている層には職場での防災活動を介して地域を意識することを促していくことが地域社会に関わる契機となるだろう。

今回の分析とアンケート実施の過程でその糸口が見えてきた。今後は、組み合わせの仮説を検証し、その他の副次的な効果についても、より成果が出るよう研究を進めていきたいと考える。

以上

注

- (1) Dniel P Aldrich“Building Resilience“ 2014年3月2日ブラン・ジャパン、名古屋フォーラム「被災者の心を支えるために～東日本大震災のこれまで、そして今後の災害に備えて～」基調講演より
- (2) Aldrich 准教授の研究によると、コミュニティの結びつきは、人口当たり犯罪被害、人口当たり労働者数、人口当たり商用車数、人口当たり質屋数、地震による死者の比率、区選挙投票率、政治集会数が平均以上であるなどで評価している。1923年関東大震災、1995年阪神淡路大震災、2004年インド洋大津波、2005年ハリケーンカトリーナをサンプルとして分析している。
- (3) 臨床心理士は、NPO法人愛知ネットより心のケアチームとして陸前高田市の避難所へ派遣された成田有子氏の協力をいただいた。
- (4) 東日本大震災女性支援ネットワーク 2012年
- (5) 東日本大震災女性支援ネットワーク研修プロジェクト担当 2013年
- (6) 岩手県社会福祉協議会
(<http://www.iwate-shakyo.or.jp/09stebiki/>)

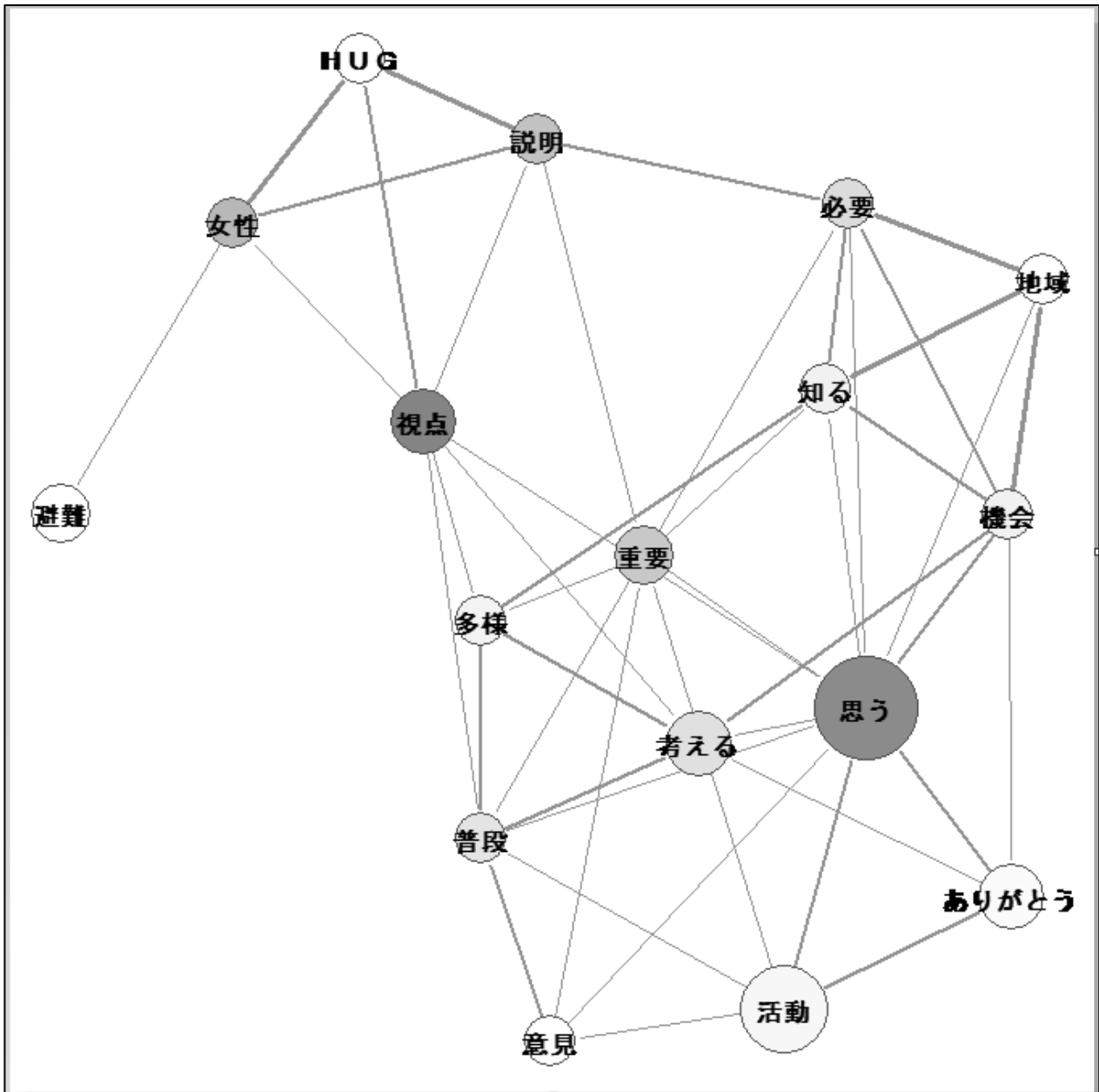
- (7) 名古屋市避難所運営マニュアル
(<http://www.city.nagoya.jp/shobo/cmsfiles/contents/0000045/45322/hinannijounneimanyuaru.pdf>)
- (8) 兵庫県心のケアセンター
(<http://www.j-hits.org/psychological/>)
- (9) http://khc.sourceforge.net/scr_r.html
- (10) 樋口耕一 2014年、p 155～156
- (11) 前出東日本大震災女性支援ネットワーク p 59～69、p 137以降
自治体から被災地へ派遣された職員にもヒアリングした。
- (12) 前出東日本大震災女性支援ネットワーク 2012年、p 69～71
- (13) 瀧本浩一、2008年、p 7～8

引用文献・参考文献・資料等

- 飯田博・林加代子「第13回コミュニティ政策学会横浜大会報告資料」
岩手県社会福祉協議会「障がいがある方たちの災害対応のてびき」(<http://www.iwate-shakyo.or.jp/09stebiki/>)
瀧本浩一『改訂版地域防災とまちづくり』イマジン出版、2008年
名古屋市避難所運営マニュアル
(<http://www.city.nagoya.jp/shobo/cmsfiles/contents/0000045/45322/hinannijounneimanyuaru.pdf>)
東日本大震災女性支援ネットワーク『東日本大震災における支援活動の経験に関する調査報告書』2012年、東日本大震災女性支援ネットワーク
東日本大震災女性支援ネットワーク研修プロジェクト担当『男女共同参画の視点で実践する災害対策、テキスト、災害とジェンダー<基礎編>』2013年、東日本大震災女性支援ネットワーク
東日本大震災女性支援ネットワーク「災害支援にジェンダーの視点を！こんな支援が欲しかった！現場に学ぶ、女性と多様なニーズに配慮した災害支援事例集」(<http://risetogetherip.org/?p=2189>)
樋口耕一『社会調査のための計量テキスト分析』2014年、ナカニシヤ出版
兵庫県心のケアセンター「サイコロジカルファーストエイド実施の手引き」(<http://www.j-hits.org/psychological/>)
防災・避難所運営マニュアルをつくる会『支援の必要な人の視点をいれた防災・避難所ノート』2013年、防災・避難所運営マニュアルをつくる会

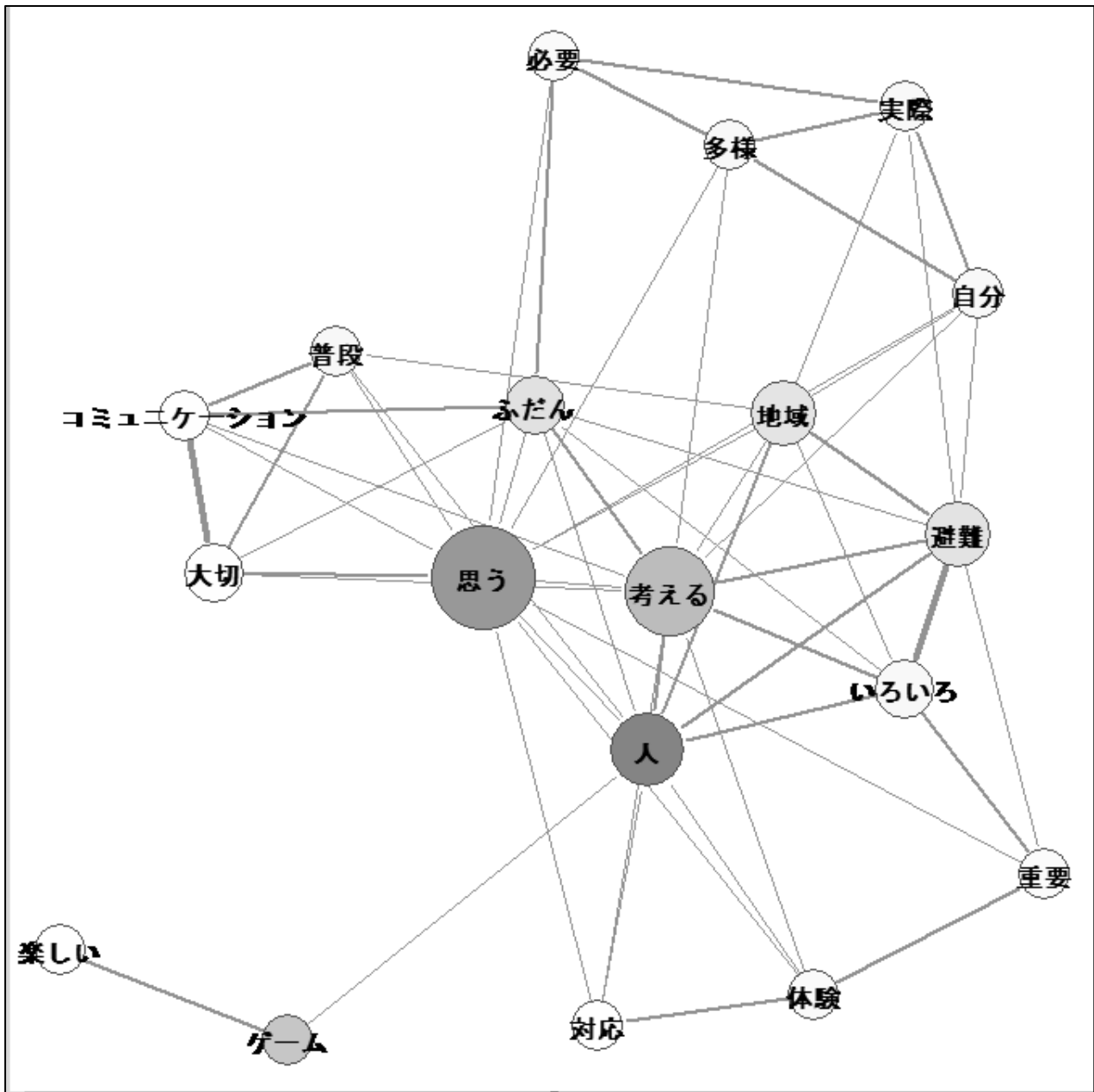
共起ネットワーク図

図 3-1 30代~40代の男性 (中心性媒介)



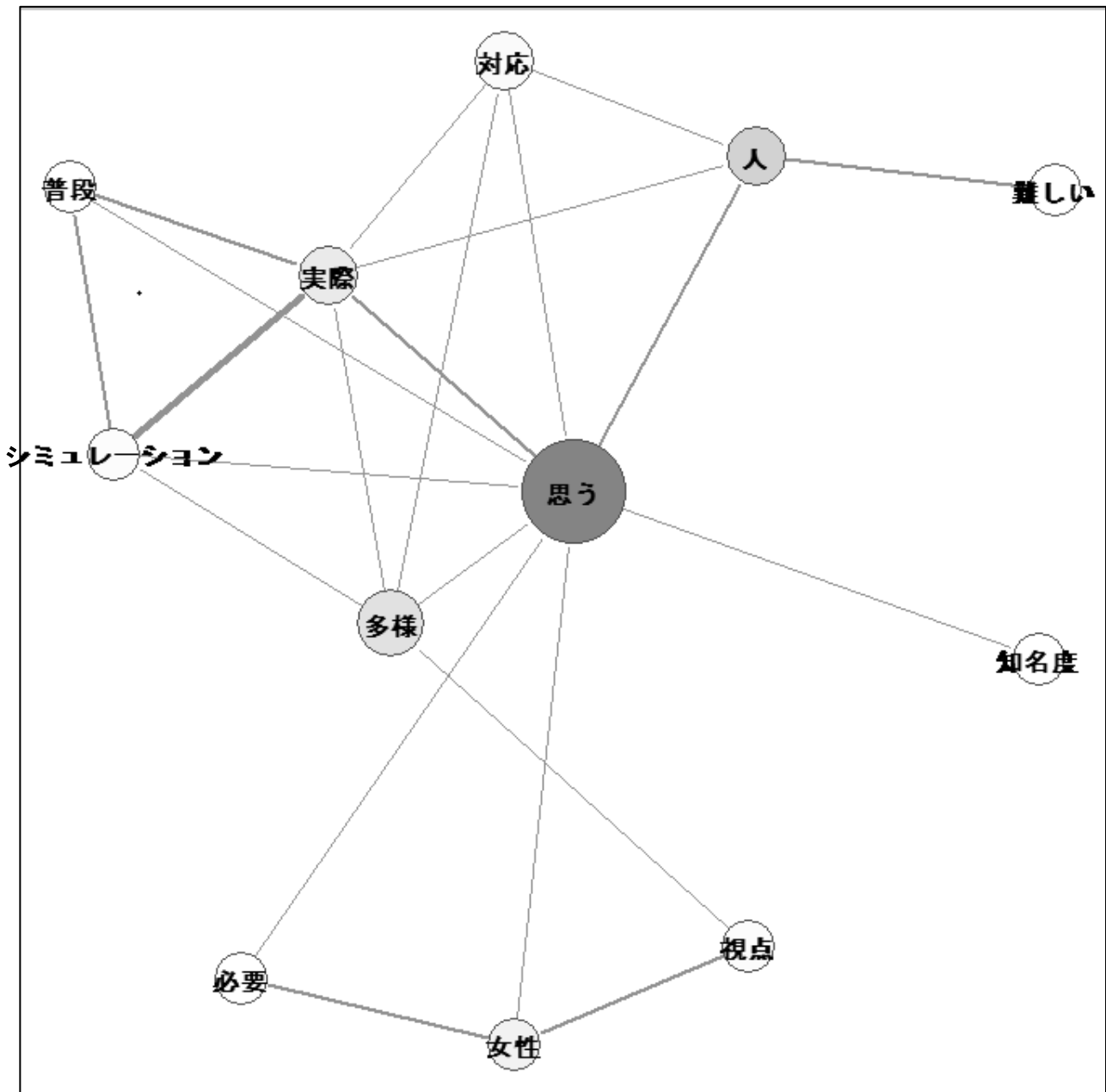
KHコーダーによる

図 3-2 30代～40代の女性（中心性媒介）



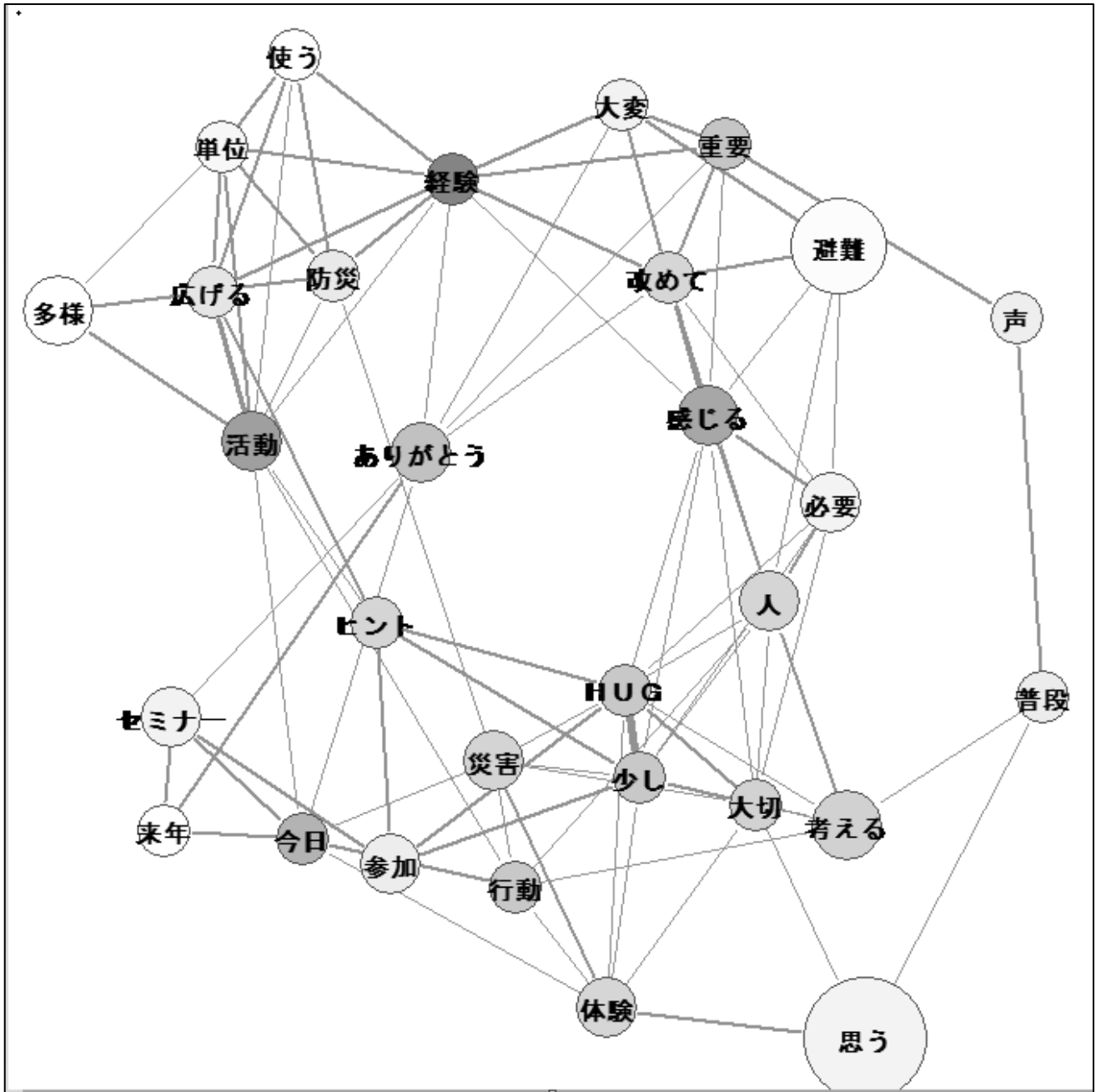
KHコーダーによる

図 4-1 50 代の男性 (中心性媒介)



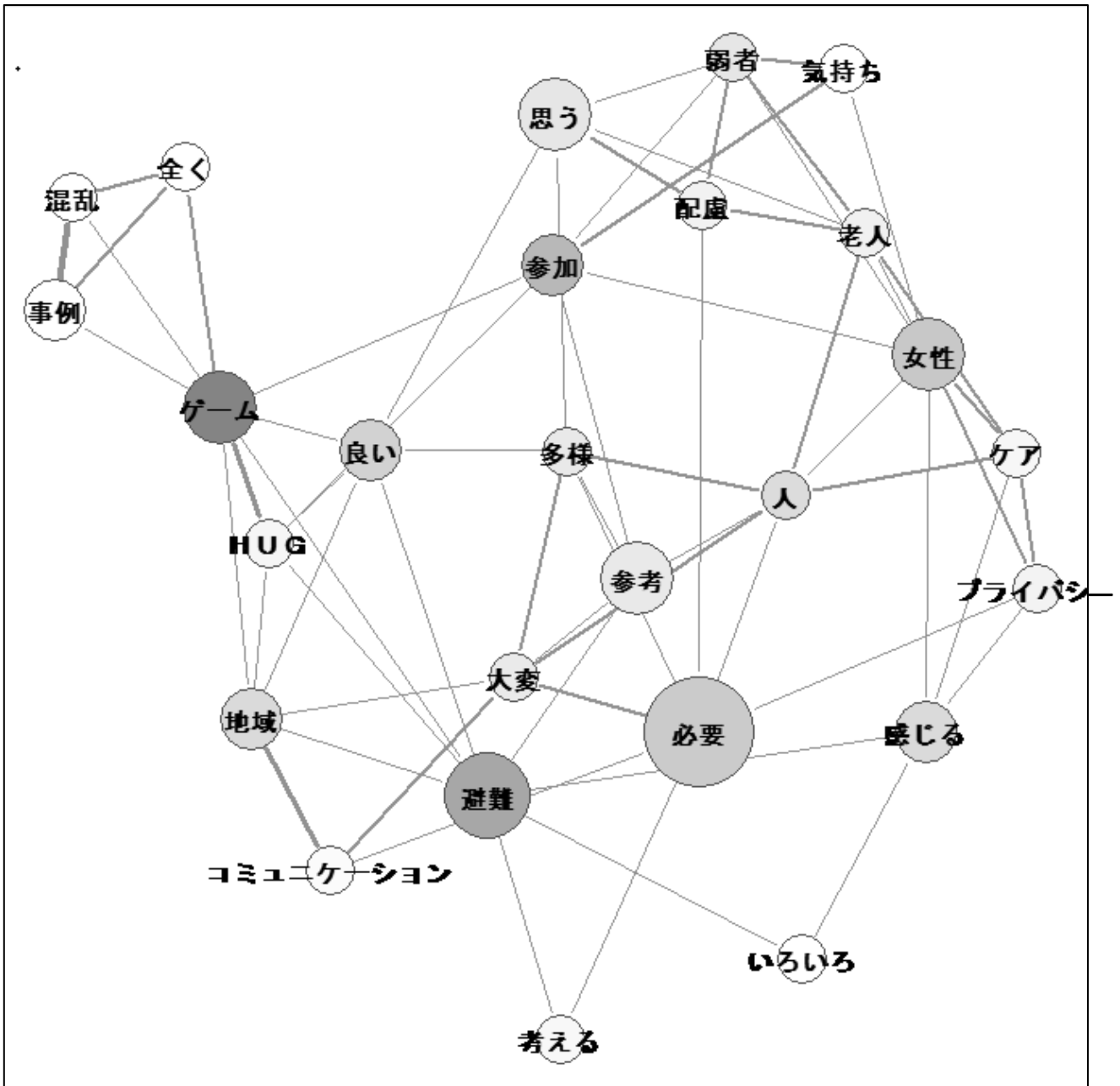
KHコーダーによる

図 4-2 50代の女性 (中心性媒介)



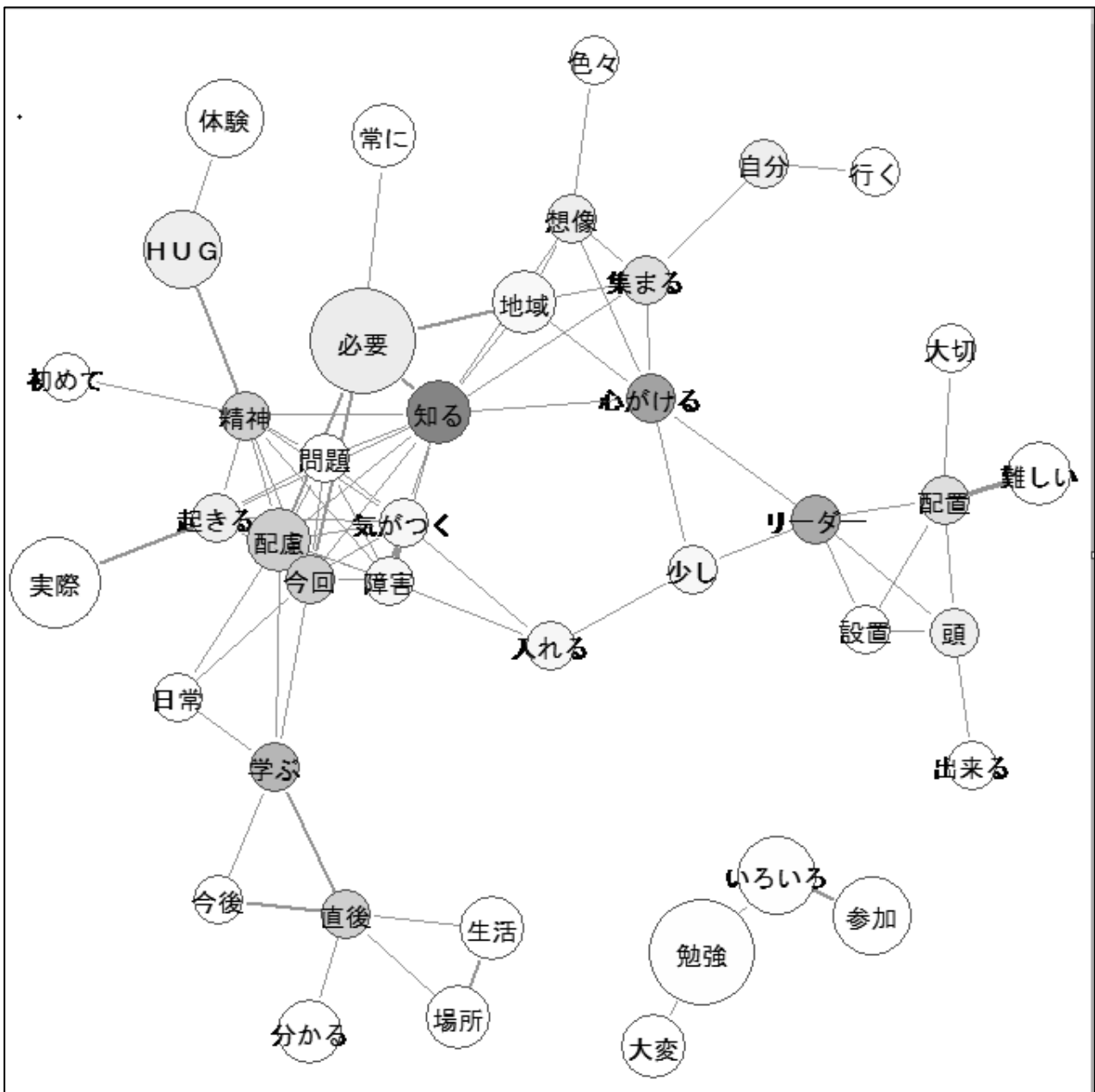
KHコーダーによる

図 5-1 60 代の男性 (中心性媒介)



KHコーダーによる

図 5-2 60代の女性 (中心性媒介)



KHコーダーによる